

昭和46年2月1日 第3種郵便物認可
平成22年11月1日発行（毎月一回一日発行）
俳句雑誌 沖 第41巻第11号



俳句雑誌[おき]

11月号 林 翔 一周忌追悼号

沖 発行所

家系図

能村 研三

編集長交替

霜降や書き込みありし古書を買ふ

さやけくて出前授業の板書かな

一軒のための踏切雁わたし

秋寂びて父の遺愛の絵の具皿

先月の「沖」創刊四十周年記念号の編集をもつて千田百里編集長、千田敬副編集長が交替することとなった。千田百里編集長には平成13年3月より七年半にわたり間編集長を務めていただいたことになる。千田夫妻は私が編集長だった時代から編集部に参加いただいているので、編集歴は二十年に及ぶかも知れない。結社においては、主宰と編集長の間で齟齬が生じると結社自体の運営が難しくなることがあるが、千田夫妻とは全くそんなこともなく、風通しがよく私が意図するところを汲んで編集していただいた。ありがたいことと感謝している。お二人共、編集に対してはプロの腕をもっていた方なので、誌面の構成や校正に対して心配はなかった。

また、今回の四十周年記念事業では予ねてからの懸案となっていた『能村登四郎全句集』の刊行に際してはかなりの時間をかけて編集作業を行っていただいたこともありがたかった。

この11月からは、辻美奈子新編集長のもと安居正浩副編集長の協力を得て、新体制のもと編集が行われて

またしても二重約束秋ぐもり

家系図は男たどりや鴉の晴

となり家に猫棲みつきし蔦明り

紅葉冷突飛な人に悩まさる

湯搔きては菜の嵩の減る寒露かな

古民家の畳廊下に秋惜しむ

いる。今度は企画面では、私も参加しようと思っている。初めて私より若い辻編集長が就任されることになり、今俳壇で活躍する若手のお一人でもあるので、「沖」に新風を吹き込んでくれるものと期待している。「沖」も四十周年の諸事業を終え新たな目標に向って邁進することになるが、あと二十カ月後の平成24年5月には五〇〇号となる。まだ、具体的にはどんなことをするのか全く決まっていないが、五〇〇号という誌齡の重さをしっかりと受け止めながら、新たな目標にしていきたいと思っている。

能村 研三



蒼茫集

江戸・小江戸

辻 美奈子

江戸・小江戸川もてつなぐ曼珠沙華
魚に触れしあたりの水の澄みにけり
生家もうなくて秋暑のピザ届く
秋草の名はそれとしてそよぎをり
ゆふべ見し火蛾とおもへば懐かしき
集まりし子ら焦げくさき九月かな

引 力

上 谷 昌 憲

引力のふつくら揺るる葡萄棚
同胞の円らかなりし黒葡萄
星涼しプラネタリウムに仰臥して
高速道大きく曲り雲は秋
ナイターの忿怒を呑み電車発つ
露けしやこもごも動く猫の耳

無庸のみどり

菅谷たけし

首塚を小高く祀る稲の花
夕顔や予定通りに日が過ぎて
二十世紀てふ球体の雫せり
正論のすこし疎まし鬼やんま
段取りへ増ゆる付箋紙虫のこ糸
〔沖〕四十周年
榎田の無庸のみどりそよぎけり

鳴 呼

大 畑 善 昭

嗚呼我ら紙魚よりもつと紙を食ひ
蟬墜ちてをり天これをうべなへり
賢治忌の森がざわざわしたるのみ
秋澄むと顔いつぱいに川の照り
露を悼 栗城光雄さん発つあの世に登四郎先生ぬて
緒をしかと露の黄泉路へ発つ草鞋



羅馬へ

千田百里

思考力も体力のうち朝曇
秋風を聴くに赤信号が邪魔
林檎園脚立のアダムを仰ぐイヴ
桐一葉矢つ張りドルは買ひかしら
陸続と秋思の面輪兵馬俑
鳥渡るわれは羅馬へわたりたし

大魚

北川英子

長き夜を大魚は泳ぎ止められず
出航のちぎれテープや雁渡し
晴れ過ぎて残菊の身の置きどころ
曼珠沙華心臓なぜに片胸だけ
桐一葉あとさき選びやうもなく
溢れるほど吾亦紅活けなほ淋し

稜線

安居正浩

空洗ふやうに雲行く夕野分
マスターは今日も饒舌衣被

稜線にくりぬかれたる秋の空
白き扉開ければ花野かもしれぬ
残る虫汝は長生きか出遅れか
醉芙蓉情捨ててこそ見ゆるもの

捨案山子

森岡正作

本陣の土間に新涼分かち合ふ
踊子の津軽訛に教へらる
だしぬけに故郷が映る今朝の秋
仰臥して雲見つめぬる捨案山子
集合も離散もままに芋の露
莧火の霧呼び霧に紛れゆく

深海

荒井千佐代

秋立てり等間隔の街路樹に
唐黍の葉騒や五島灘昏れて
木犀の香の濃く通夜の明けにけり
炎昼の聖堂といふ深海に
手を鳴らし赤子歩ます草の花
フランスパンに峰のふたつや天高し

花野経由

久染康子

列島を残暑手籠めにしてゐたり
鶏頭の影の分厚き佃路地
月見舟月の出側へ傾ぎけり
在まつり裏参道に幟旗
土日のみ花野経由の路線バス
鳩尾に手を置き秋の昼寝かな

厄日過ぐ

松本圭司

川底の石に日がさし厄日過ぐ
鰯雲せせらぎ心せせらぎぬ
海鞘食べてすくと胸の痞^{つかえ}消ゆ
うなづいてばかりある母衣被
時折は人打つ真似の秋団扇
風波の生まれては消え蜻蛉飛ぶ

野分浪

遠藤真砂明

秋暑く訃報重ねの潮ぐもり
蛸に母の一世の骨ひろふ

鬼やんま空は太古の静けさに
枝豆を根こそぎ採つていけと言ふ
黒松が崖に突つ立つ野分浪
岬打つ力盛りの野分浪

樺を焚き

藤原照子

雪溪へ御釜へ雲の影迅し
園児合宿先着の西瓜二個
送火や戸隠人と樺を焚き
緩急の緩のよはひや花野行
油抜く竹あぶりをり雁のこゑ
投函につなぐ心や桐一葉

仮面の裏

吉田政江

休憩の塩飴配り街残暑
怠け癖つき夏果ての出納簿
絞りきるかぼすに縮み白身魚
浜干しの透き間すきを秋の風
稲びかり仮面の裏の赤うるし
うす闇に涼しき眼あり阿修羅像

遠き景

田所節子

朝涼のいきいき刻む万歩計
夏帽やまばゆくてみな遠き景
かぶと虫昔ブリキで手を切りし
かはいらしく我を通しけり生身魂
新涼の匙にかがやく夕餉の灯
力抜けば広き空あり蒲の如糸

頼み言

辻直美

黒揚羽一景なべて揺るがるる
案山子いま静かな村の賑はひや
上の子の一目置かれ小鳥来る
虫売や虫より低く身をかがめ
星飛んで無音のひとへ頼み言
夜長かな葉書一枚また読んで

よごれなき風

望月晴美

山登りしてたくさんのこんにちは
休む間も紐をゆるめず登山靴

猛夏かな二階まで来て何の用
自性院のよごれなき風師碑涼し
遠花火来し方なべてよしとせり
山頂の風は透明秋あかね

血気

秋葉雅治

澄雄逝く淡海に素風立ち初めて
木登る子仰ぐ子秋の雲やさし
近頃の血気をかしき厄日かな
あすへ続く批評半ばの夜長の灯
石白き女帝陵墓の秋思かな
子規逝きしあと升さんの糸瓜棚

洋なだ照り

松井志津子

まだ誰も踏まぬ風紋今朝の秋
秋暑し洋照りを分け船帰る
帰船みな位置に納まり雁渡し
三分の交換停車葛の花
涼新た母の遺せしものを着て
マトリョーシカ次第に小さき秋思かな

潮鳴集

キャプテン

大森 春子

八月をひつくり返すフライパン
キャプテンと呼ばれ少女の夏終る
かなかなや井戸杵のみの館跡
宵闇に遠くいつもの汽笛かな
なむなむを覚えて帰る地藏盆

いつからの

甲州 千草

いつからの鍵の二重よ虫時雨
障子貼る十三日の金曜日
塩辛とんぼ一瞬父の匂かな
逃走より闘争思ふ風の葛
叩かれて逃ぐる蒟蒻秋に入る

鱸 釣

栗城 光雄

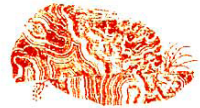
賢治尋ねてこの夏をしめくくる
今生の忘れものめく遠花火
廃れたる赤のまんまのままごと
釣糸の弛みて悔やむ鱸釣
コスモスの風得て風を持て余す

小鳥来る

林 昭太郎

峰雲やイルカを量る針の揺れ
食パンの肌理^{きめ}こまやかに今朝の秋
草市のつめたき釣^{つり}銭を受けとりぬ
新涼の陶人形の陶の肌
育児書の栞みづいろ小鳥来る

沖作品



あかときの風新しき稲かをる

埼玉

大石 誠

落蟬を掃けばひと声ちいと鳴き

ようそろの客は一名島の秋
ありなしの風に座敷の秋簾
後ろ手について二人の良夜なる

神奈川

鈴木 浩子

とつとつと津軽の民話夜の秋
高枝鉄秋天大きく切り取りぬ
一本の鉛筆で足る夜長かな

宵闇の宿坊靴の紐を解く

大阪

望月木綿子

かなかなや母逝きし日の空の色
水巡る厠の神も露の世も
人間の深みのいろに吾亦紅

二百十日厄介な事に眼をつむる
秋風が立ち真相は藪の中
尼様のこちで抱きぬ濃りんだう

能村研三選

秋の風酸素たつぷり運びくる

市川市

佐々木 群

内なる波浪眼前の秋の海
秋灯や手書きの古き設計図

大正の館のかをり小鳥来る
秋蟬の坂のぼりつめ無言館
ジーンズの破れ撫でゐる晩夏かな

市川市

七田 文子

きちきちや二車線道路跳びおほし
新涼や夜の匂ひの確かなり
台風圏秘密めきたるくりや事

月光や致死量浴ぶるために佇ち

東京

五十嵐 章子

ゲームセット急に湧き出づ蟬時雨
炎昼やホームの果てのエレベーター
揚花火泣くの一瞬忘れをり

遅刻して視線集まる秋暑かな
サングラスはずし存外やさしき目

沖作品 15句選評

*

能村研三

ようそろの客は一名島の秋 大石 誠

「ようそろう」とは「良う候」と書き、「良ろしく候（よろしくそろう）」ということだそう。元々海軍などで使っていた言葉のようだが。舵を握っている操舵手が例えば、「針路〇度」と、船長などに報告し、それに対して「ようそろう」「針路〇度」のまま進んでください」という風に使う。島を行き来する定期船はたとえお客さんが一人であろうと、欠航するわけには行かない。「島の秋」という表現を使っておられるので、おそらく作者は、一人旅をしてある島を訪れたのだろう。何かおだやかな海の風景にぼつかりと浮かぶ島が見えてきた。

高枝鋏秋天大きく切り取りぬ 鈴木 浩子

高枝鋏は背の届かない三メートル位まで伸ばせるので、高い木の枝も簡単に切れる。脚立や梯子を持ち出さなくても、茂った葉を刈り取ることができ便利である。気になっていても中々

切ることが出来なかった高所の枝払いが出来て、今まで葉が茂って空を遮っていたのが、一挙に明るい空が見え爽快な気分になった。高枝鋏も最初は使い慣れないと難しいが、だんだん慣れてくると面白いように切れる。「秋天を大きく切り取る」という仕草から爽快な軽やかさが伝わってくる。

人間の深みのいろに吾亦紅 望月木綿子

夏の終り、細い茎が枝分かれして伸びた先に小指の先ほどの可憐な花穂をつけ、秋の深まりと共に紅を濃くしてゆく。もつと色を詳しく言うところ「暗紅紫色」とでも言うようになる。生け花に好まれ、お月見では薄などと一緒に供えられることが多い。昔から、詩歌にもよく詠まれてきたが、この独特な深みのある色を作者は人間の深みの色として捉えた。人生の齢の深まりもあつてこそその感覚なのである。

内なる波浪 眼前の秋の海 佐々木 群

眼前に見えるのは、人気のなくなつた少し寂しい秋の海の風景。夏の間賑やかだった海辺も人もまばらで、浜に押し寄せる波の音までもが秋を感じさせる。作者は、その寂しげな秋の海を一人で訪れた。俳句を作るものにとつては格好の場所で、考へに耽るのにも相応しいところだ。心の中で読み取る波は眼前のものとは違つて何か心を奮いたせてくれるものがあつた。

台風圏秘密めきたるくりや事 七田 文子

台風が接近してくると、眠れなくなつたりすることがある。夜おそくまで台風速報をみて、勿論こちらの方に来てほしくなれと思いつつも、何か心が騒ぐものがある。「備えあれば愁いなし」とは昔の人が言つた言葉だが、厨にあつて食料の備蓄状況や、もしもの備えを万全に考える秘密基地にもなつた。
(以下略)